

防災減災

防災学習は2つの道に分かれます。一つは地学と地理学がオーバラップする自然の営みを学ぶこと、もう一つは土木・建築などの工学系の分野を学ぶことです。ところが国内では、前者の学習が十分とは言えません。

地理学では自分の住んでいる地域の人口や産業は調べますが、そこがどういった地学的現象でできているところなのか、過去の地震や水害はどうだったのかを調べる学習は少ない。こういった学習はそのまま地学分野にリンクして、郷土を知る中

名古屋大学地震火山
研究センター長

山岡耕春氏



郷土知る学習が重要
地学的現象や災害史

でよく自然に土地、歴史や災害史について知ることができるのです。災害があるたびに「生まれてこの方経験がない」といった被災者のインタビューが記事になりますが、当たり前のごとく、巨大災害はそうそう同じ所では起こりません。しかし災害は過去に起きたことは未来にも起きる、という鉄則があります。

その未来は明日かもしれないし、100年後かもしれない。例えば扇状地が土石流という自然現象の繰り返しで形成されていることからわかるとするべきで、ローカルであるべきです。その土地に合わせた、「どうしたらいいの」という問いと答えがあるのですから。

災害・防災文化はまだ低いレベルにあります。事故は起こるものという前提で車も鉄道も造られます。同じように自然に向き合い、「安全に完全はない」「安全でない場所」に目を背けていないか」といったことを常に心にためて、運を天に任せない自助への一層の努力が必要

(防災教育推進協会理事長)

常二備へヨ

4年目のジュニア防災検定

事前課題
家族で防災について話し合ったり、避難経路の確認などし、レポートにまとめる

検定試験
検定テスト問題例(初級)
軽いプラスチック筒の中に①、②のように粘土玉を入れて机(つえ)をゆらすと、①が②より倒れにくい。これを踏まえて下の問いを考えて下さい

検定テスト問題例(2級)
震源に近い地震計がゆれ(P波)を感知
震源の位置、規模(マグニチュード)を瞬時に推定し、震度、S波の到達時刻を予測
緊急地震速報
S波(強いゆれ)が来る前に緊急地震速報を発表

観測点	震源からの距離	P波の到達時刻	S波の到達時刻
A	37.0km	10時34分42秒	10時34分47秒
B	(1)	10時34分48秒	10時34分59秒
C	125.8km	10時34分54秒	(2)

問1 観測点Bの震源からの距離は、何kmですか
問2 観測点CにおけるS波の到着時刻は、何時何分何秒ですか
問3 地震の発生時刻は、何時何分何秒ですか

事後課題
防災新聞やポスターの制作

表彰と発表
表彰式
成績優秀者に贈られる「バッジ」

全国の小・中学生に、防災への関心を高めてもらう目的で平成25年に始まった一般財団法人防災教育推進協会(東京都千代田区)主催の「ジュニア防災検定」(文部科学省、内閣府など後援)が、企業によるメセナの一種として利用されたり、高校生以上を対象にした「防災検定」を新たにスタートさせたりするなど、4年目の今年、さらなる広がりを見せている。南海・東南海地震や首都直下型地震などが想定される中、自助防災への関心の高まりが期待される。

(編集企画室企画部長 藤浦淳)

ジュニア防災検定

「高校生向け」新設



△家族ぐるみで
ジュニア防災検定は、家族で防災について話し合ったり、家族防災会議を開催したり、家族防災検定を提出する事前課題(家族防災会議リポート作成)、検定テスト、地元防災活動や災害史を学習してポスターや新聞記事を作成する事後課題(防災自由研究)の3部構成。合格者はJBRバッジが贈られるほか、成績優秀者は表彰式に招待されて表彰、最優秀者の発表なども行っている。

同協会事務局は「お子様が

世代超え 高まる自助意識

防災について取り組んでいると、「両親など家族の関心も高まるようです」と語る。実際、保護者からも「家庭でも協力していきたい」「自分でも考えてみたい」といった声が増えてきている。

初年度から受検を続けている清風中学校(大阪市天王寺区)の小牧康彦教頭は「生徒の災害への関心も、これまでは何か起こったときだけに限られていましたが、今は持続的になりました」と効果を感じ、面談の際などに保護者から学校の防災体制についての質問が増えたという。

△メセナ、基金で
今夏に地元の子供たちの受検に取り組んだのは、岡山トヨタ自動車(岡山市北区)が行っていたが、本格的な社会貢献として実施。6家族8人の受検だったが、今後も取り組みたいという。佐藤慎也営業副本部長は「岡山は災害が少ないとされてきましたが、何が起きるかわからないのが現代。ひとりでも多くの子供が防災に関心を持ってほしい」と話す。

ほかにも大塚商会(東京都千代田区)が基金を活用して受検を促進するなど、企業の取り組みも徐々に活発化している。

△自治体単位で
学校単位の受検は現在、私立校中心だが、自治体でも受検させる動きが広がっている。現在16自治体が予算をつけて公立の小・中学校で実施。今年から大阪府泉佐野市で全小4年生、茨城県稲敷市で全5年生を対象に受検することを決めたほか、4自治体で全校受検が行われる。

一方、新たにスタートした防災検定は、事前、事後課題はなく難易度別に1〜4級を設定。2級では地震や津波、台風が起るメカニズムから地震保険についての設問など本格的な内容で、高校生では2級が最高レベルとなっている。検定を受ける前に、読本『わたしたちの防災』で事前学習(事前)が義務付けられている。問い合わせは防災教育推進協会(03-3550-5000、info@pik-japan)。

「常二備へヨ」は、甲南学園(神戸市)の創立者、平生八三郎(慶応2年〜昭和20年、企業家、文部大臣)が昭和13年の阪神大水害で被害を受けた学園の復旧時、学生たちに訓示した言葉。碑は甲南小学校に建立され、平成7年の阪神大震災で被災した、甲南大にも設置された。